ことぶき「なか」だより
No. 153
2012. 10.

発行所　日本キリスト教団　なか伝道所
〒 231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 305
Tel.（045）671-1109
振替　00200 － 1 － 47369
E-Mail : naka@church.jp　http://church.jp/naka/
発行者　渡辺英俊　（題字　松橋 順）

宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会　主日礼拝　日曜日　午前 10 時 30 分より

ブラジルに派遣されて

アルト・ダ・ボンダージ・メソジスト教会での働き

小井沼眞樹子宣教師に聞く

去る六月一〇日、任期の更新のため一時帰国された小井沼眞樹子宣教師をお迎えして、その働きについて語っていただいた。

小井沼宣教師は、現地での働きのほかにも、「ラテンアメリカ・キリスト教」ネットを通じて、草の根のブラジルの教会の活動について、貴重な情報を紹介して下さっている。

その任地であるアルト・ダ・ボンダージは、ブラジルでも最も貧しいと言われるノルデスチ（北東部）の小さな町だ。そこでの働きを学び、宣教とは何かを共に考えた。

ブラジルの歴史的背景

- １５００年　ポルトガル人によって「発見」。
- ポルトガル王国の植民地支配。男性ばかりの入植。
- イスラム教による影響を受けた国教カトリック。
- 先住民の捕縛、殺戮。しかし、労働力として期待はずれ。
- アフリカから奴隷を導入。
- ヨーロッパ人、先住民、アフリカ人との混血＝人口の基層。
- １８８８年の奴隷制廃止後に大量移民時代。
- 多民族、多文化国家の成立。
- 権力者、富裕層に有利な社会システムの温存。腐敗。
- 奴隷制の後遺症。
  貧困層の非人間的状況。⇒麻薬、アルコール依存症。
  家庭を築く文化の欠損。
  社会の不正に対する無力感。⇒奇跡願望の熱狂的信仰。

アルト・ダ・ボンダージの教会

ブラジルの歴史は、ポルトガル王国による植民地化を抜きにしては語れません（表参照）。よかれ悪しかれ、その結果をふまえてブラジルの今があります。

ブラジルは今や世界第六位の経済大国でありながら、社会的不平等は南アフリカに次いで世界第二位です。大きな経済的格差があるブラジルの現実です。

そんなブラジルのペルナンブコ州オリンダ市アルト・ダ・ボンダージ地区のアルト・ボンダージ・メソジスト教会に、私は赴任しました。

この教会は、一九八七年に、アメリカからの宣教師ダヴィ・ブラックバーン牧師が路上礼拝を始めたところから出発しました。その後、保育園「ジェンチ・ノーバ」（新しい人々）と木工所を開設しました。

一九九二年、ダヴィ牧師が不慮の事故で感電死されました。そのため木工所は廃止しましたが、一九九七年、アメリカの教会のボランティアの援助を得て会堂建設を始めました。

写真は現在の教会の周辺地域ですが、下水や道路のインフラが整っていないために、雨が降ると教会の前も、路地もぬかるんでしまいます。人々の生活も仕事のない人が多く（仕事を得るための技能の不足などが原因）、そのため家庭内暴力や虐待、麻薬やアルコール依存の問題、そして、低年齢での妊娠や出産―貧困の連鎖を生みます―など深刻な問題を抱えています。

雨が降ればぬかるみになる教会の前の道路

教会の礼拝は、日曜日の夜七時から九時に行われます。前半で賛美や祈り、信仰生活の証、献金があり、その後説教があります。主の食卓（聖餐式）も月に一度行います。

週ごとの礼拝のほか、創立記念礼拝や洗礼式、ナタール（クリスマス）とフェスタ（祝会）などがあります。そのどれにおいても、音楽（ギター、ドラム、歌、など）が重要な位置をしめています。賛美グループの奉仕者養成と若者たちの居場所作りのため、

苦労しながらポルトガル語で説教

音楽教室を開設しました。現在二名の講師と一名のコーディネーターがおり、ギター、ドラム、エレクトーンのクラスがあります。この活動は皆さんからの音楽献金に支えられています。この活動を通して、若者たちが教会に、そして賛美グループに参加し始めています。そしてその中から受洗者も与えられました。

祈祷会は火曜日の夜七時半から九時に行われます。みんなで証の時を持ち、それぞれの課題を持ち寄り、それにそって祈りの時を持っています。教会学校もあります。子どもたちのクラスだけでなく、おとなのクラスもあります。ここではテキストに沿って、メソジスト教会の教理や聖書を学びます。

親しい交わり―地域の中へ

昨年八月から毎週水曜日の朝、教会隣接の保育園で、子どもたちと職員のために短い礼拝を担当しています。毎回最後にヴァイオリンの演奏をし、子どもたちがとても楽しみにしてくれています。この奉仕をするために、火曜日の夜に保育園の厨房で働いている教会員の方の家に一泊しています。この宿泊によって地区の教会員の現実の生活を知るとても貴重な体験をしています。この教会員の方とペアで地域を訪問します。

いつも訪問する一人の教会員は生粋の先住民で、八歳でヨーロッパ人にさらわれ、一一歳で性的暴力を受けた、悲しく過酷な過去を背負った女性です。現在は脳梗塞を患い車椅子生活です。

もう一人の若い女性も、訪問の時に知り合いました。道のひどく悪い坂の下の家で生活しています。両足が不自由で車椅子を使用していますが、家は坂の下にあり移動は困難なため、引きこもり、何の交わりもなく孤立していました。また経済的に困難なため、医者にもちゃんと見てもらっていません。折り紙の組み立て作品の本を見せたら、とても興味を持ってくれ、習い始めました。今では日曜日の午後、定期訪問を楽しみにしてくれています。

少女たちのダンスグループ「アラバンザ」もあります。ここに集まってくる少女たちもそれぞれに問題を抱えています。それぞれが重荷を背負っていても、彼女たちは単純なことの中に大きな喜びを見つけながら明るく生きています。

共生を通して発見したこと

経済的に貧しく持てない、状況。教育的には機会がなく知らない、政治的には無力、そして社会的には存在しないかのように無視されている人びとですが、しかし彼ら・彼女らが持っているものがあります。それはシンプルで強い信仰、愛情深い心、助け合う共同体です。

「わたしはあるという名の神に叫び求めていると、その人自身がある（存在する）ものになっていく」

とは木田献一氏の言葉です。彼ら・彼女らは、現代社会に福音の担い手として存在しているのです。奴隷制の傷を負って生きている人々が「奴隷の家から解放される神」を信じる力は絶大です。そしてこの共同体のただ中に、復活のイエスが臨在されるのだと実感しました。（まとめ　遠藤泰弘）

力いっぱい、讃美を踊ります

風　景

私がはじめて「なか伝道所」に関心を持ったのは、一五～六年ほど前、渡辺英俊牧師の多くの本、特に「現代の宣教と聖書解釈」（新教出版社　一九八六年）に出会ったときでした。初めはむずかしく、読みづらいと思いながら、それでも少しずつ興味を惹かれ読みました。歯に衣着せぬはっきり指摘している個所に心魅かれました。

それまでも、私なりに真面目に聖書を読んでいたつもりですが、ところどころ納得できない個所や疑問に感じる個所に出会い、それは私の読みが浅いせいだ、信仰がないせいだ……と、思い込もうとしていました。しかし、「現代の宣教……」を読んで、聖書を読んでいるつもりで字面だけを追っていることに気づかされました。

聖書の時代の人びとが伝承として言い伝えていたことを、そのまま受け入れていたことや、当時の人びとの信仰を盛り込んで記されている個所が多く含まれていることなどを知りました。

「なか伝道所」に行きたいとの思いがだんだんふくらみました。いろんなことがあり、「今だ、この時を逃がしたら、私の年齢的にもなか伝道所に行けなくなる」、との思いでドアを叩きました。伝道所の仲間は快く迎えてくれました。

礼拝の使信の後、少しの時間ですが、疑問に思ったことや感じたこと等をその場で話し合うことがありますが、その時いろんな人の思いに耳を傾けることができ、今までより具体的に、より身近にイエスの足跡を見出すことができた、との思いを持つことができます。

風が吹けば飛んでいくような一粒の小さな種ですが、今後も主イエスの足跡を見失うことなく、歩んで行きたいと強く願っています。

（渡辺恵子）

使信

よく言ってくれた

渡辺英俊

汚れた霊に取りつかれた幼い娘を持つ女が、すぐにイエスのことを聞きつけ、来てその足もとにひれ伏した。女はギリシア人でシリア・フェニキアの生まれであったが、娘から悪霊を追い出してくださいと頼んだ。イエスは言われた。

「まず、子供たちに十分食べさせなければならない。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない。」

ところが、女は答えて言った。

「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます。」

そこで、イエスは言われた。

「それほど言うなら、よろしい（渡辺私訳「よく言ってくれた」）。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった。」

女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。

（マルコによる福音書　七章二五～三〇節）

イエスの差別発言

助けを求めてきたシリア・フェニキアの女性とのやりとりは、イエスが差別発言をした……と考えられるほとんど唯一の個所なんですね。

これをカバーするために、マルコは、「ティルスの地方」という外国で、一人の異邦人女性がイエスの「足もとにひれ伏して」へりくだった信仰の物語というふうに脚色してしまっている……。こういう、「信仰の話」という脚色を取り除いてみると、

二六節　一人の異邦人の母親がイエスに、娘から悪霊を追い出してほしいとお願いする

二七節　イエスがこれを拒む際、異邦人を「犬」にたとえる差別発言をする

二八節　母親が厳しくこれに反論する

二九節　イエスが自分の誤りに気づき、謝罪して母親の願いを聞き入れる

三〇節　イエスの言葉通り子どもは癒される

という、恐らくガリラヤに住んでいた外国人女性とイエスとの出会いの出来事が、一つの奇跡物語として伝承されているんですね。これは教会が創作するメリットのない話で、恐らくイエスの実際の活動に根っこを持つ伝承と考えられるんですね。

「犬」とは？

国際化されたガリラヤの、外国人住民もいたどこかのムラで、思いがけなくユダヤ人ではない母親から声をかけられる……。霊能者として、貧しい人びとの医療に取り組んでいたイエスにとって、これは想定外のことだった……。思わず不用意な応答をしてしまったんですね。

もともとユダヤ人にとって、神を信じず、律法を守らない「異邦人」は接触を避けるべき相手で……。それが民族差別の感情と結びついて、異邦人を「犬」と呼ぶ差別語になっていた……。異邦人の女性から助けを求められ、あわてて拒もうとしたとき、

「……子どもたちのパンをとって、小犬にやってはいけない。」

と、思わず言ってしまう……。潜在する差別の意識というのは、こういうとっさの反応で露呈してしまうんですね。

テーブルで食事をしている場面にたとえて、おなかをすかせた子どもがパンを食べているのに、そのパンを取り上げて犬にやってしまう親はあるまい……。イエスの運動も、まずユダヤ人に集中したい、だから異邦人の求めに応じている暇はない……云々。すべてをいっぺんにやることはできないわけですから、運動方針としてまずユダヤ人、その後異邦人……というふうに考えたとしても、それはそれでよかったんでしょうけど……。

「小犬」という柔らげられた表現とはいえ、ユダヤ人一般にあった差別表現で異邦人を「犬」にたとえてしまったのは、差別行為そのものだったんですね。

イエスを「神様」として崇めたい人びとにとっては、この話をこんなふうに解釈すること自体がつまずきで、猛反発を受けてしまう……。だから、こ

えーとねえ

食事の準備が整ったのに、なかなか席につかない姉と兄にしびれを切らして

とみ（大きな声で）**「神さま、感謝していただきます。アーメン！」**

すぐに食事になりました。

母（心の中でつぶやく）**「その手があったか……。」**

（つぼを心得ている　　遠藤友実　9歳）

の話を最初に記録したマルコからして、異邦人女性のへりくだった信仰の話にすりかえていて……。教会が差別と正面から向き合うことを妨げてきたんじゃないでしょうか。

しかし、一人の人間として紀元一世紀のユダヤに生きたイエスは、差別的な文化の中でその文化をインプットされて「心」（意識）が形成されているんで……。そういう差別意識も弱さも負った一人の人間だった……。それが人間であるという現実の一部なんですね。

大事なのは、それをどう超えるかということだ……。それがこの事件の意味だと思うんですよ。

「パン屑」？

イエスの答えに対する、母親の反論がすごいんですね。

「だんなさん。そうおっしゃいますが、食卓の下にいる小犬でも、子どものパン屑くらいは貰えるんじゃないでしょうか。」

これは、「たとえ犬であっても……」と差別を受け入れている答えではあり得ませんね。差別に対する厳しい告発と、痛烈な皮肉をここに読み取らなければならないでしょうね。

「犬なら犬でもけっこうですが、屑もくれないと言うんですか？」

これに対するイエスの反応が、人間らしさとは何かを示していると思うんですよ。「それほど言うなら……」という新共同訳は、女性の信仰の側に話をずらした訳で。マタイになるとさらに「婦人よ、あなたの信仰は立派だ」（一五章二八節）という付け加えがついちゃう……。原文は「この言葉のゆえに、行きなさい」で、「よく言ってくれた」と訳すべきだと思うんですよ。

差別を指摘されたとき、直ちにそれに気づいて、「よく指摘してくれた。ありがとう」と答えることができるしなやかさを持つことが、人間らしさということなんですね。差別的な文化の中では、差別意識を背負い込むことは避けられない……。だからこそ、人からの指摘であれ、自分からの気づきであれ、それに気づいたときにそれを認めて糾すことが、みずからの人間らしさをとりもどすことになる……。

イエスは、この母親の糾弾に対して、「よく言ってくれた。ありがとう。」と答えて、すぐにその求めを受け入れているんですね。そして、子どものパンを小犬にやるようにではなくて、そのパンを今いちばん必要としている人にまず分けるようにして、癒しの働きが行われる……。ここで民族差別の壁が越えられているんですね。

わたしたちは今、こういう心のしなやかさを失った社会に生きているんですね。いつになったら、日本政府も日本社会も、そして日本の教会も、

「よく言ってくれた。ありがとう。」と、心を入れ変えてくれるんでしょうかね。

ど ま

▽八月八日、「私の信仰Q＆A―キリスト教って何だ？」発刊。なか伝道所創立二五周年を記念して（広告欄参照）。一番気に入っているのは表紙で。大西洋上で見た夜明けの光景を、創世記の「光あれ」という神の言葉と重ねたもの。出版社がこちらのアイデアを見事な図版に表現してくださり。中身は読んだ方々に評価していただくほかないものの、表紙だけでも見てほしいという密かな願い。

▽八月二五～二六日、上郷森の家で夏期キャンプ。二五人が参加。担当者の方々の周到な準備で、放射能問題を中心に学習。わりとゆったりしたスケジュールで、日頃出席できない人たちとも、交流の時間が多く取れ、よかったとの評価。

▽いずみ愛泉教会（仙台、布田秀治牧師）に招かれ、九月七～一〇日仙台へ。東日本大震災の被災地を一度お訪ねしたいと願っていたのがかなって。八日、一日かけて、布田牧師の案内で仙台市荒浜、名取市閖上、そして石巻市を一巡。瓦礫はあらかた片付いて、草原のようになっているものの、残る土台に町並みがしのばれ、災害の大きさを改めて実感。

○何ができると言へぬが悲し被災の地
　想ひ来たりてここに立てども

▽東北教区災害支援センターで教区の取組が懸命に行われているのを見、伝道所からの献金を届けたのと、九日の主日礼拝の説教を別にすれば、旧知の方々に再会、もてなしをいただき、ご馳走になりに行ったような旅で恐縮。（渡辺英俊）

支援献金（七月分）
支援献金（八月分）
感謝してご報告します。

渡辺英俊新刊書
――なか伝道所創立二五周年記念出版
「私の信仰Q＆A
―キリスト教って何だ？」
ラ・キ・ネット出版刊
（¥1000　送料¥210）
申し込みは、はがきまたはメールでなか伝道所へ